

保険毎日新聞「保険みちくさ物語」020

早稲田大学と生命保険一都の西北の人脈と保険ビジネス

早稲田大学で日本保険学会が開催された折、ある人から「福沢諭吉と違って、大隈重信は保険とかかわっていないが、早稲田と縁のある保険会社があったのだろうか」と聞かれた。咄嗟に保険会社の名前が浮かばなかったが、戦前にまで思いを馳せると浮かび上がった会社がないわけではない。

福沢諭吉が『西洋旅案内』の中で、保険をわが国に紹介したことは有名である。福沢の門下からは、優秀な保険人が輩出された。日本最初の近代生命保険会社である明治生命を設立した阿部泰蔵は福沢門下生である。この他、慶應の塾長であった門野幾之進を社長にして千代田生命が明治 37 年(1904)に設立されている。

これに対して、私学の雄と並び称される早稲田からも生命保険事業が誕生している。日清生命である。同社は、明治 40 年(1907)1 月設立され、着実な発展を遂げた。掲載した「保険案内」は大正 3 年発行のものであるが、営業当初の業務拡大はめざましいとはいえないまでも順調であり、大正 6 年には本社を新築した（掲載した絵葉書を参照）。

この新社屋については、別稿で詳しく述べることにし、ここでは大隈講堂の設計者である佐藤功一が設計したものというにとどめておく。今回、注目していただきたいのは、写真の人物が同社の社長ではなく大隈重信であることだ。有名人なので大隈侯とすら記されていないが、この絵葉書は、日清生命がまさに「早稲田の保険会社」であることを印象付けるものである。

大正 3 年の「保険案内」に記された経営陣を見てみよう。中野武宮は二代目社長。高松藩の出身で、大隈に従って立憲改進黨結成に参加した。専務の池田龍一は東京専門学校（早稲田大学の前身）を卒業した後、ドイツで法学を学び、明治 38 年に母校である早稲田大学（明治 35 年に東京専門学校から大学に昇格）の講師となった人物である。池田は、中野を継いで後に第 3 代社長となった。ちなみに「保険案内」に記載されている 5 名の取締役のうち山田英太郎、田中唯一郎、増田義一の 3 名が早稲田（東京専門学校）の卒業生であり、残りの二人は大隈の立憲改進黨との関係の深い人物である。

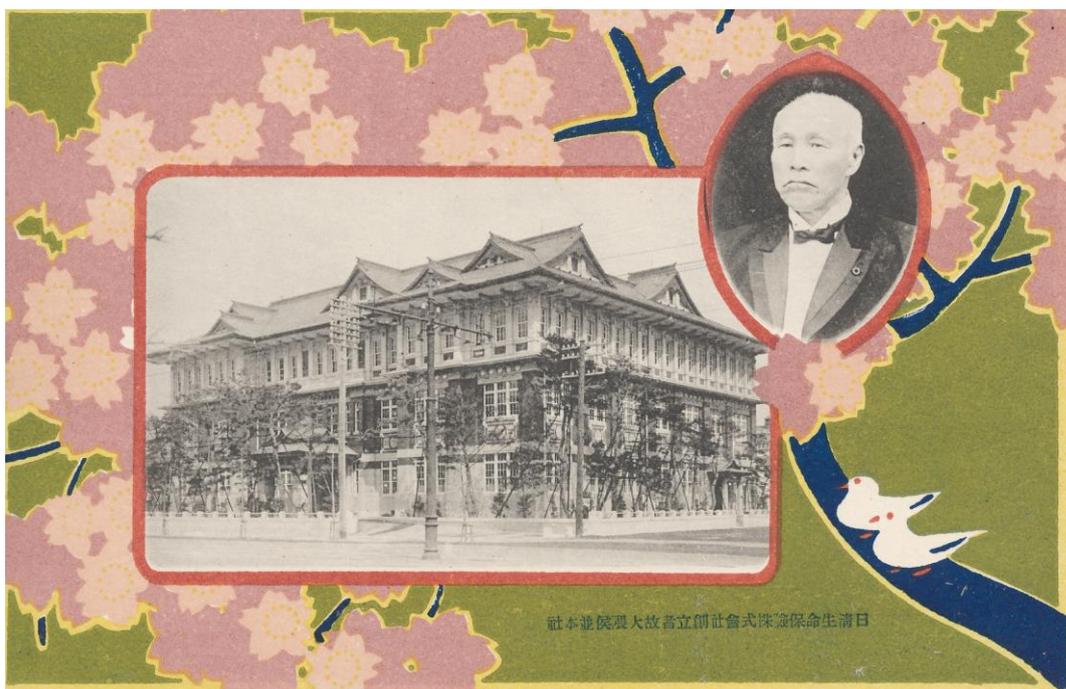
同社の設立の趣旨と経緯は、次のようなものであった。「明治 39 年侯爵大隈重信、早大総長法博高田早苗、我国実業界の巨頭子爵澁澤榮一、本邦郵政の創始者男爵前島密氏等の発意に依り早稲田学園出身実業家相寄り日支両国に亘る一大生命保険を興すの急務なるを認め早大校賓校友の援助と財界 40 余名の賛同の下に資本金 100 万円を以て株式会社を組織し、40 年 3 月 1 日に営業を開始せり」（稲見泰治著『保険はどこへ』文雅堂、1926 年から引用）。ちなみに大隈と前島は明治 14 年の政変および立身改進黨の結成をとおして深い絆で結ばれており、また後に文部大臣を務めた高田早苗の妻が前島密の長女であった（高田早苗については画像を参照）。このように、日清生命は、大隈による生命保険会社であり、それは同時に早稲田の生命保険会社であった。「日支両国に亘る一大生命保険」という理想は、いかにも戦前の早稲田の気概を感じさせるが、実際にはとくに大陸で保険営業が伸び

たという形跡はない。発起人の一人に神戸華僑の麥少彭という人物がみられるので、華僑や大陸に渡った日本人に対する保険営業に熱心であったことは事実であろう。

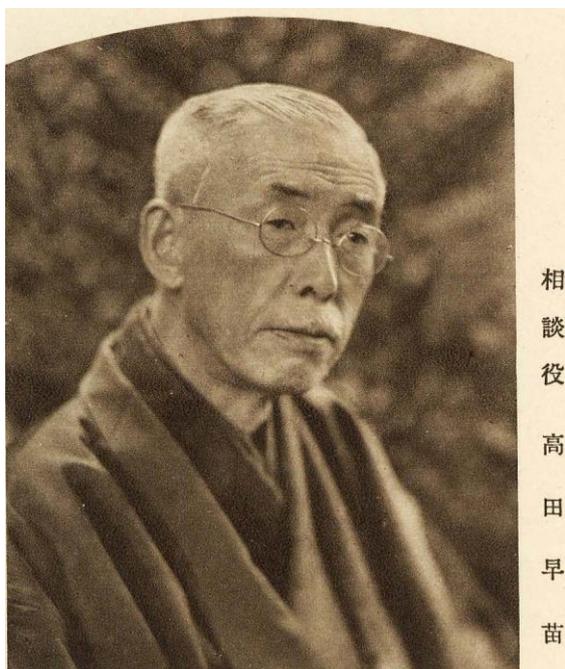
日清生命のライバル会社は、明治 37 年に設立されていた千代田生命だった。営業成績についてみれば、同社は千代田生命の後塵を拝することになった。しかし堅実な発展を示し、大正末には愛国生命や東洋生命などの「先輩会社」の業績を追い越す、中堅生保になっていた。

だが昭和恐慌以降の時代においては、五大生保と財閥系生保を除く生保は業績を伸ばすことができなくなっていた。この苦境において経営にあたったのは望月軍四郎であった。望月は、昭和 4 年から昭和 11 年まで取締役社長として同社を経営したが、彼は早稲田人脈ではなく、慶應の卒業生であった。望月は、生命保険の実務経験が豊かであったわけではなかったが、かりに望月の生保経営者としての能力が十分であったとしても、日清生命程度の規模の生命保険会社にとって昭和恐慌から戦時体制にかけての厳しい競争に勝ち抜いていくことは容易ではなかった。同社は、同規模の非財閥系生保と同様に業績不振に陥り、昭和 16 年 10 月には、仁壽生命（明治 27 年 9 月設立）とともに野村生命に合併された。野村生命は、真宗信徒生命から経営陣の移動があり社名を共保生命に変更した会社を、昭和 9 年に野村が合併して出来た生命保険会社である。昭和 7 年に落成した日清生命館（千代田区大手町二丁目 1 番 1 号）の画像を掲載した。この建物は、野村生命に合併された後には丸の内野村ビルディングと呼ばれ、平成になって取り壊された。設計者は大正 6 年に落成した社屋と同じく佐藤功一であった。

先に引用した稲見泰治『保険はどこへ』は、当時の保険会社全社の経営を舌鋒鋭く分析した興味深い書物である。日清生命の解説を「野球では勝っても保険ではまだ早稲田は到底慶應の敵ではない」と結んでいる。稲見は実業における早稲田人脈の弱さを敗因としているが、それだけでは十分に説得力はなく、今後の経営史的な研究が俟たれるところである。



大隈重信と日清生命新築本社 佐藤功一設計 大正6年落成



「日清生命新築記念誌」昭和7年より転載



「日清生命館」佐藤功一設計 昭和7年落成（大手町）